



女屋宮田遺跡

まちづくり交付金事業（市道 00 - 081 号線道路改良工事）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 10. 1

前橋市埋蔵文化財発掘調査團



例　　言

- 1 本報告書はまちづくり交付金事業（市道 00-081 号線道路改良工事）に伴い実施された「女屋宮田遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名	女屋宮田遺跡
調査主体者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 戸塚良明
調査場所	群馬県前橋市女屋町 40-4 ほか
遺跡コード	21 F 9
発掘調査期間	平成 21 年 7 月 24 日～平成 21 年 8 月 18 日
整理・報告書作成期間	平成 21 年 8 月 19 日～平成 22 年 1 月 29 日
発掘・整理担当者	佐野良平（技研測量設計株式会社）
- 3 本書の編集は佐野が行った。原稿執筆は I を神宮 聰（前橋市教育委員会）、他を佐野が担当した。尚、挿図・図版を含む全ての記録をデジタル化して編集し、DTP 手法を用いた組版作業を行った。作業は前田和昭（技研測量設計株式会社）が担当した。
- 4 発掘調査及び整理作業参加者は次のとおりである。

山田誠司 大川明子 丸山和浩 桃園正志（以上、技研測量設計株式会社調査員）
大川悦子 大久保征太郎 遠藤進子 遠藤好樹 木村広美 下田順子 高山 愛 藏澤佳子 田部井美紗子 平野ミチ子 福島裕子 本多和子 矢内司郎 矢内ヒロ子
（以上、作業員・整理補助員）
- 5 本調査における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管している。
- 6 下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します（敬称略）。

女屋 勇 山下工業株式会社

凡　　例

- 1 全体図及び遺構平面図に示した方位は北に座標北を表し、グリッド座標については国家座標（日本測地系）IX 系の X=41120.000・Y= - 62880.000 を基点に X0・Y0 の原点を設け、4 m ピッチに軽線を X、縦線を Y として番付して呼称した。
- 2 挿図は国土地理院発行 1/25,000 「前橋」「大胡」、前橋市発行 1/2500 都市計画図を使用した。
- 3 土層の色調は「新版標準土色図」（農林水産技術会議事務局監修、財团法人日本色彩研究所色票監修）に基づいている。
- 4 各挿図の縮尺は、それぞれに付してある。
- 5 遺構名前は、堅穴住居：H、溝：W、土坑：D、ピット：P である。
- 6 表中の計測値については（ ）は現存値を表す。

目　　次

調査に至る経緯	3
調査の方法と経過	3
基本土層	3
立地と環境	4
遺構と遺物	5
まとめ	15
写真図版	
抄録	



I 調査に至る経緯

本発掘調査は、まちづくり交付金事業（市道00-081号線道路改良工事）に伴い平成21年6月2日に実施した試掘調査結果を踏まえ、平成21年6月8日付けで前橋市長・高木政夫（道路建設課）より埋蔵文化財発掘調査の依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受けた前橋市教育委員会より、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長 戸塚良明（以下「調査団」という。））に発掘調査実施について協議があった。しかし、調査団では既に市内数ヶ所において直営による発掘調査を実施しており、調査団直営による調査の実施が困難であるため、民間調査組織に業務を委託したいとの回答をした。民間調査組織の導入については、依頼者である前橋市の合意も得られ、7月17日付けで前橋市と調査団との間で発掘調査業務契約を締結し、その後、7月22日付けで調査団と民間調査組織である技研測量設計株式会社（代表取締役社長 鳥田大和）との間で発掘調査業務契約を締結し、発掘調査開始に至る。

II 調査の方法と経過

調査方法は調査区内に排土置き場設置の関係上、調査区を北・南に二分割し北側調査区から調査を開始、調査終了後北側調査区を埋め戻し、南側調査区の調査を開始した。表土掘削は試掘調査の結果をふまえ遺構確認面まで重機（0.45エンボ）で掘削、遺構調査に関しては土層観察用ベルトを適宜設定し埋土の堆積状況・遺物出土状況に留意しながら行った。遺構図化については電子平板を用いて平面図・断面図の測量・編集、一部断面は画像からオルソフォトに変換して編集を行った。遺構の写真記録は35mmカラーフィルム・リバーサルフィルム・デジタルカメラの3種類を使用し担当者が撮影した。

調査の経過概要（平成21年7月24日～平成21年8月18日）

調査は対象地域を南北二分し、前半に北半部、後半に南半部の遺構調査を実施した。

7月24日 調査区設定。
7月27日 重機（0.45エンボ）、ユニットハウス、仮設トイレ搬入。表土掘削開始。
7月28日 遺構確認調査開始。器材搬入。
7月29日 遺構掘削開始。
8月3日 溝在区北半部全般撮影、遺構測量。
8月4日 溝在区北半部掘め戻し。南半部表土掘削開始。
8月5日 遺構確認調査開始。
8月6日 遺構掘削開始。
8月12日 溝在区南半部全般撮影、遺構測量。
8月17日 溝在区南半部掘め戻し、仮設トイレ、器材搬出。
8月18日 重機・ユニットハウス搬出。

III 基本層序

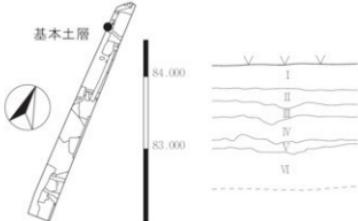


Fig. 1 基本層序

本遺跡の層序は上面からの擾乱の影響が少ない調査区北西壁を基本土層として観察した。本遺跡が広瀬川低地帯内等の立地条件から、流水によって砂質の黒色土と黄褐色土が交互に堆積していることが確認できる。またVI層下では礫層が確認されるため旧河川の河床の可能性が考えられる。

基本土層	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
基土作土	（1092-1） 黒褐色の堅土（ロコトナカニシキ）を含む粘土質土、縮まり強い、粘性やや弱い。					
Ⅰ にじいろ黄褐色土	（1093-3） 黄褐色の堅土（ロコトナカニシキ）を含む粘土質土、縮まり強い、粘性やや弱い。					
Ⅱ 黑褐色土	（1092-2） 黑褐色の堅土（ロコトナカニシキ）を含む粘土質土、縮まりやや有り、粘性やや強い。					
Ⅲ 黄褐色土	（1093-4） 黄褐色の堅土（ロコトナカニシキ）を含む粘土質土、縮まりやや有り、粘性やや強い。					
Ⅳ 黑褐色土	（1093-5） 黑褐色、下部に小礫土層（ロコトナカニシキ）を含む粘土質土、縮まり弱い、粘性弱い。					

IV 立地と環境

女屋宮田遺跡は前橋市街地から東へ約7kmの旧木瀬川女屋町内に位置する。本遺跡は約24,000年前の浅間山噴火を起因とする火山泥流堆積物で形成された前橋台地と赤城山南麓の間に約3km幅で広がる旧利根川流路である広瀬川低地帯に立地する。広瀬川低地帯内は桃木川・広瀬川などの中小河川が網目状に流下している。桃木川は本遺跡南西で赤城山麓から流下する寺沢川と合流し南東流する。河川によって形成された微高地には集落遺跡が、後背湿地には生産地が存在している。現在、木瀬地区は旧利根川河床の水はけの良い土壤を利用して梨の生産地として発展している。広瀬川低地帯



は從来大規模開発が少ない事もあり確認された遺跡が少なく、むしろ一般国道17号（上武国道）改築工事や圃場整備に伴う発掘調査が多い赤城山南麓に多く分布する傾向であったが、近年学校施設や市道改良工事に伴う発掘調査によって調査事例が増加の傾向にある。本遺跡周辺地域における時代ごとの遺跡概要は以下の通りである。

女屋宮田遺跡周辺における旧石器時代の遺跡は希薄であり、赤城山麓を南流する荒砥川以東に多少分布する。縄文時代になると今井白山遺跡（4）では中期の敷石住居・土坑、筑井八日市遺跡（3）では後期の土坑、小島田八日市遺跡（11）では草創期のピットが確認されている。弥生時代の遺跡は荒砥川流域の東岸に多く、荒砥川以西では稀有である。今井白山遺跡（4）では後期の土坑が確認されている。古墳時代になると通躰地ともいえた平野部に新たな開発を求めて低地周辺の微高地に集落を移し始める。遺跡数も前時代と比べて増加する。野中天神遺跡（2）では後期の堅穴住居跡、筑井八日市遺跡（3）では5世紀後半～6世紀初頭築造の古墳、豪族居館の可能性がある一辺約160mの方形区画遺構、中期の堅穴住居跡、今井白山遺跡（4）では前期～後期の堅穴住居跡、石関西墓塚遺跡（6）では中・後期の堅穴住居跡、筑井中屋敷遺跡（12）では後期の堅穴住居跡が確認されている。古墳は荒砥川流域、二之宮町、西大室町周辺の荒砥古墳群や広瀬川西岸の広瀬古墳群といった広瀬川底地帯の両岸に多く築造される。本遺跡東側で南流する寺沢川東岸の微高地上にも古墳多く存在する。5～6世紀のものが主体で、そのほとんどは土地改良などにより削平されており、石室の一部や埴輪が散在している。その他の古墳時代の遺跡として棗遺跡（8）がある。奈良・平安時代の遺跡として野中天神遺跡（2）、石関西山田遺跡（5）、石関西墓塚遺跡（6）、伊勢遺跡（9）、宮田遺跡（10）、筑井中屋敷遺跡（12）で堅穴住居跡が確認されている。また野中天神遺跡（2）、筑井八日市遺跡（3）、石関西山田遺跡（5）ではAs-B下水田跡を検出している。中世以降の遺構では、野中天神遺跡（2）では屋敷跡、西片貝源鳥遺跡（7）では火葬墓、中世城館の下長磯城（13）、中世初期の用水路である女掘（14）などがある。

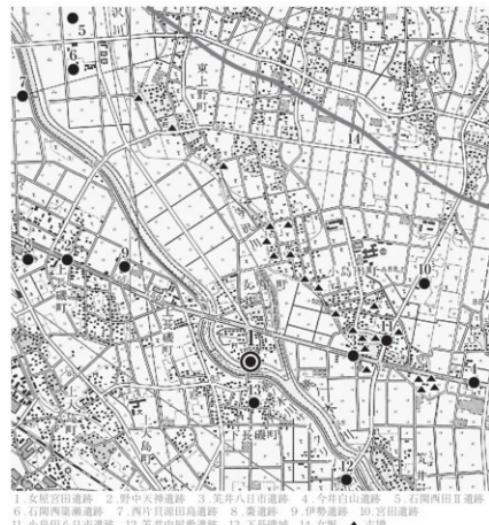


Fig. 2 周辺遭跡 ($S = 1/25,000$)



Fig. 3 女屋宮田遺跡位置図



V 遺構と遺物

H-1 (Fig. 6・10, PL 2・5)

位置 X 2、Y 3・4 グリッド 主軸方向 N - 51° - E 規模 長軸 4.54 m、短軸 (1.16) m、壁現高 27cm。面積 (4.66)
mf 床面 平坦ではあるが硬化面はない。 出土遺物 土師器高坏・坏・壺。 時期 出土遺物が少量であるため判断し難いが4～5世紀代と考えられる。

H-2 (Fig. 6・10, PL 2・5)

位置 X 2・3、Y 4～6 グリッド 主軸方向 N - 0° - E 規模 東西(3.36)m、南北 8.2m、壁現高 29cm。面積 (26.10)
mf 床面 部分的に硬化面がみられるが全体的には硬化が弱い。 重複 W-1、P-4 と重複しており、新旧関係は本遺構→W-1→P-4 である。 出土遺物 赤井戸式土器、土師器高坏・坏・壺・台付壺。 時期 出土遺物から4世紀代と考えられる。

H-3 (Fig. 6、PL 2)

位置 X 3・4、Y 7 グリッド 主軸方向 N - 60° - E 規模 長軸 (3.2 m)、短軸 (1.96) m、壁現高 24cm。面積 (3.30)
mf 床面 平坦で部分的に硬化。 出土遺物 土師器壺・壺。 時期 出土遺物が少量であるため判断し難いが5世紀代と考えられる。

H-4 (Fig. 6・10・11, PL 2・5)

位置 X 2・3、Y 9～11 グリッド 主軸方向 N - 19° - W 規模 長軸 7.04 m、短軸 (5.28) m、壁現高 34cm。面積 (24.50)
mf 床面 平坦ではほぼ全体的に硬化。 重複 W-3 と重複しており、新旧関係は本遺構→W-3 である。 瓢 灰・炭化物の集中から北壁中央部にあったと考えられる。 出土遺物 土師器高坏・坏・壺・壺、コモ石。 時期 出土遺物から5世紀第4四半期と考えられる。

H-5 (Fig. 6、PL 2)

位置 X 2・3、Y 12・13 グリッド 主軸方向 N - 68° - E 規模 長軸 4.2 m、短軸 (2.9) m、壁現高 20cm。面積 (8.15) mf 床面 平坦で中央部硬化。 重複 H-6 と重複しており、新旧関係は H-6 → 本遺構である。 出土遺物 土師器小片、コモ石。 時期 出土遺物からは判断し難い。 H-6との新旧関係から5世紀以降と考えられる。

H-6 (Fig. 7・11, PL 3・6)

位置 X 1～3、Y 11～13 グリッド 主軸方向 N - 35° - E 規模 長軸 7.08 m、短軸 (7.0) m、壁現高 15cm。面積 (30.60) mf 床面 平坦ではあるが硬化面はない。 重複 H-5 と重複しており、新旧関係は本遺構→H-5 である。 瓢 調査区際の北東壁東側よりに位置。残存状況は不良であり袖は確認できず、前面に灰・炭化物の集中が見られるのみである。 出土遺物 土師器高坏・坏・壺・壺、コモ石。 時期 出土遺物から5世紀第3四半期と考えられる。

H-7 (Fig. 7・12, PL 3・6)

位置 X 2、Y 15・16 グリッド 主軸方向 N - 61° - E 規模 短軸 4.54 m、長軸 (3.1) m、壁現高 20cm。面積 (9.50)
mf 床面 平坦ではあるが硬化面はない。 重複 H-8・9、W-4・5 と重複しており、新旧関係は H-9 → 本遺構、H-8 → W-4・5 である。 出土遺物 土師器壺・壺・壺、コモ石。 時期 出土遺物から8世紀代と考えられる。

H-8 (Fig. 7・8, PL 4・6)

位置 X 2、Y 16・17 グリッド 主軸方向 N - 89° - E 規模 長軸 (3.2) m、短軸 (1.68) m、壁現高 16cm。



面積 (5.10) m² 床面 平坦ではあるが硬化面はない。 重複 H-7・10、W-5と重複しており、新旧関係はH-10→本造構・H-7→W-5である。 出土遺物 土師器壊・壺 時期 出土遺物から8世紀代と考えられる。

H-9 (Fig. 8, PL. 4)

位置 X 1・2、Y 13~15グリッド 主軸方向 N-52°-E 規模 長軸5.78m、短軸(5.14)m、壁現高9cm。面積 (23.10) m² 床面 上層により削平されている。 重複 H-7と重複しており、新旧関係は本造構→H-7である。 出土遺物 土師器壊・壺 時期 出土遺物からは判断し難い。H-7との新旧関係から古墳時代と考えられる。

H-10 (Fig. 8, PL. 4)

位置 X 2・3、Y 16・17グリッド 主軸方向 N-28°-E 規模 長軸(5.8)m、短軸(5.8)m、壁現高9cm。面積 (16.50) m² 床面 平坦ではあるが硬化面はない。 重複 H-8、P-5と重複しており、新旧関係は本造構→H-8→P-5である。 出土遺物 土師器高环・壊。 時期 H-8との新旧関係から古墳時代と考えられる。

W-1 (Fig. 8, PL. 2)

位置 X 2・3、Y 5グリッド 主軸方向 N-102°-E 長さ (4.6) m 最大幅 上幅2.24m、下幅0.62m。 深さ 0.26m 形状 逆台形。 重複 H-2、P-4と重複しており、新旧関係はH-2→本造構→P-4である。 出土遺物 土師器小片。 時期 覆土の状況から中世以降と考えられる。 備考 通水の痕跡は認められない。

W-2 (Fig. 8, PL. 4)

位置 X 2・3、Y 6グリッド 主軸方向 N-89°-E 長さ (12) m 最大幅 上幅0.92m、下幅0.51m。 深さ 0.42m 形状 逆台形。 出土遺物 土師器小片。 時期 覆土の状況から中世以降と考えられる。 備考 通水の痕跡は認められない。

W-3 (Fig. 8, PL. 4)

位置 X 2、Y 9グリッド 主軸方向 N-80°-E 長さ (2.18) m 最大幅 上幅0.58m、下幅0.46m。 深さ 0.12m 形状 逆台形。 重複 H-4と重複しており、新旧関係はH-4→本造構である。 出土遺物 内耳鍋 時期 出土遺物・覆土の状況から中世以降と考えられる。 備考 通水の痕跡は認められない。

W-4 (Fig. 9, PL. 4)

位置 X 2・3、Y 15グリッド 主軸方向 N-82°-E 長さ (4) m 最大幅 上幅0.98m、下幅0.65m。 深さ 0.27m 形状 U字形。 重複 H-7と重複しており、新旧関係はH-7→本造構である。 出土遺物 土師器小片。 時期 覆土の状況から中世以降と考えられる。 備考 通水の痕跡は認められない。

W-5 (Fig. 9, PL. 4)

位置 X 2・3、Y 16グリッド 主軸方向 N-94°-E 長さ (4.32) m 最大幅 上幅1.36m、下幅0.58m。深さ 0.22m 形状 逆台形。 重複 H-7・8と重複しており、新旧関係はH-7・8→本造構である。 出土遺物土師器小片。 時期 覆土の状況から中世以降と考えられる。 備考 通水の痕跡は認められない。

Tab. 1 土壇・ピット計測表

遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	形状	出土遺物	備考
D-1	X 2、Y 7	1.23	0.78	0.26	箱円形	土師器、帆石	
P-1	X 2、Y 3	0.55	0.50	0.71	箱円形	陶器	
P-2	X 2、Y 4	0.49	0.44	0.37	箱円形	土師器	
P-3	X 2、Y 4	0.37	0.31	0.22	箱円形	土師器	
P-4	X 3、Y 5	—	—	0.44	—	五輪塔(空風輪)	調査区東壁で確認
P-5	X 3、Y 17	0.48	(0.33)	0.60	箱円形		

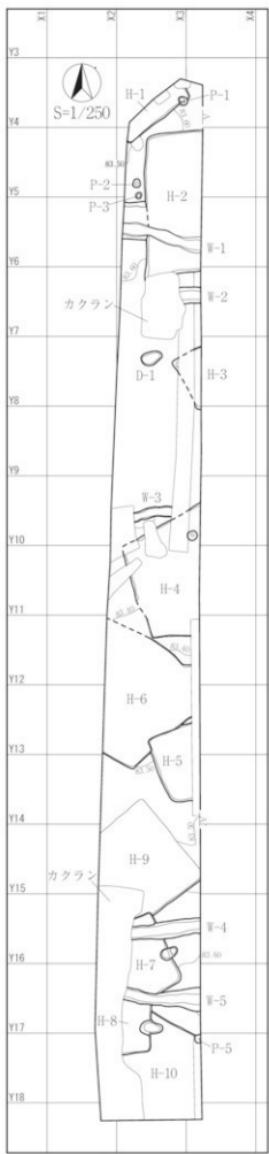


Fig. 4 女屋宮田遺跡 全体図

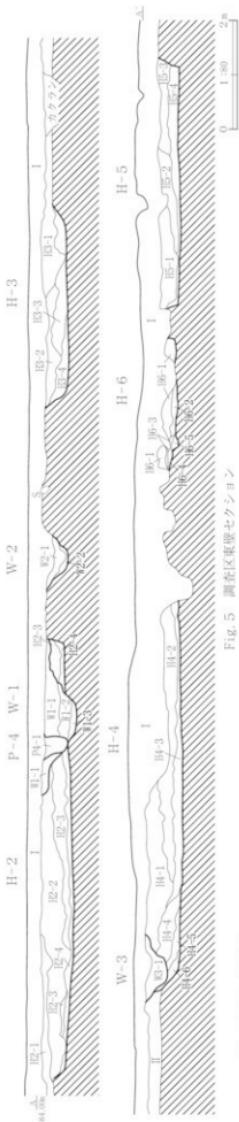


Fig. 5 調査区概要マップ

- H-1~5, W-1~3, P-4, 8P
H-1: 黒褐色土。(1093/2) 黒褐色土上位。解まり有り、粘性を有し、粒度を有し。
H-2: 黒褐色土。(1093/4) 細胞状石を含む。解まり有り、粘性を有し。
H-3: 黒褐色土。(1093/3) 細胞状石を含む。解まり有り、粘性を有し。
H-4: 黒褐色土。(1093/3) 黄褐色土を含む。解まり有り、粘性を有し。
H-5: 黒褐色土。(1093/2) 黄褐色土を含む。解まり有り、粘性を有し。
H-6: 黒褐色土。(1093/3) 黄褐色土を含む。解まり有り、粘性を有し。
P-1: 黒褐色土。(1093/4) 黑褐色土上位。解まり有り、粘性を有し。
P-2: 黒褐色土。(1093/2) 黄褐色土を含む。解まり有り、粘性を有し。
P-3: 黒褐色土。(1093/3) 黄褐色土を含む。解まり有り、粘性を有し。
P-4: 黒褐色土。(1093/4) 黄褐色土を含む。解まり有り、粘性を有し。
W-1: 黒褐色土。(1093/2) 黑褐色土上位。解まり有り、粘性を有し。
W-2: 黒褐色土。(1093/2) 黑褐色土上位。解まり有り、粘性を有し。
W-3: 黒褐色土。(1093/2) 黑褐色土上位。解まり有り、粘性を有し。
W-4: 黒褐色土。(1093/2) 黑褐色土上位。解まり有り、粘性を有し。
W-5: 黒褐色土。(1093/2) 黑褐色土上位。解まり有り、粘性を有し。
8P: 黒褐色土。(1093/3) 黄褐色土を含む。解まり有り、粘性を有し。
H-1: 黒褐色土。(1093/2) 黑褐色土上位。解まり有り、粘性を有し。
H-2: 黒褐色土。(1093/4) 黄褐色土を含む。解まり有り、粘性を有し。
H-3: 黒褐色土。(1093/3) 黄褐色土を含む。解まり有り、粘性を有し。
H-4: 黒褐色土。(1093/4) 黄褐色土を含む。解まり有り、粘性を有し。
H-5: 黒褐色土。(1093/3) 黄褐色土を含む。解まり有り、粘性を有し。
H-6: 黒褐色土。(1093/4) 黄褐色土を含む。解まり有り、粘性を有し。
P-1: 黒褐色土。(1093/3) 黑褐色土上位。解まり有り、粘性を有し。
P-2: 黒褐色土。(1093/2) 黑褐色土上位。解まり有り、粘性を有し。
P-3: 黒褐色土。(1093/3) 黄褐色土を含む。解まり有り、粘性を有し。
P-4: 黑褐色土。(1093/3) 黄褐色土上位。解まり有り、粘性を有し。

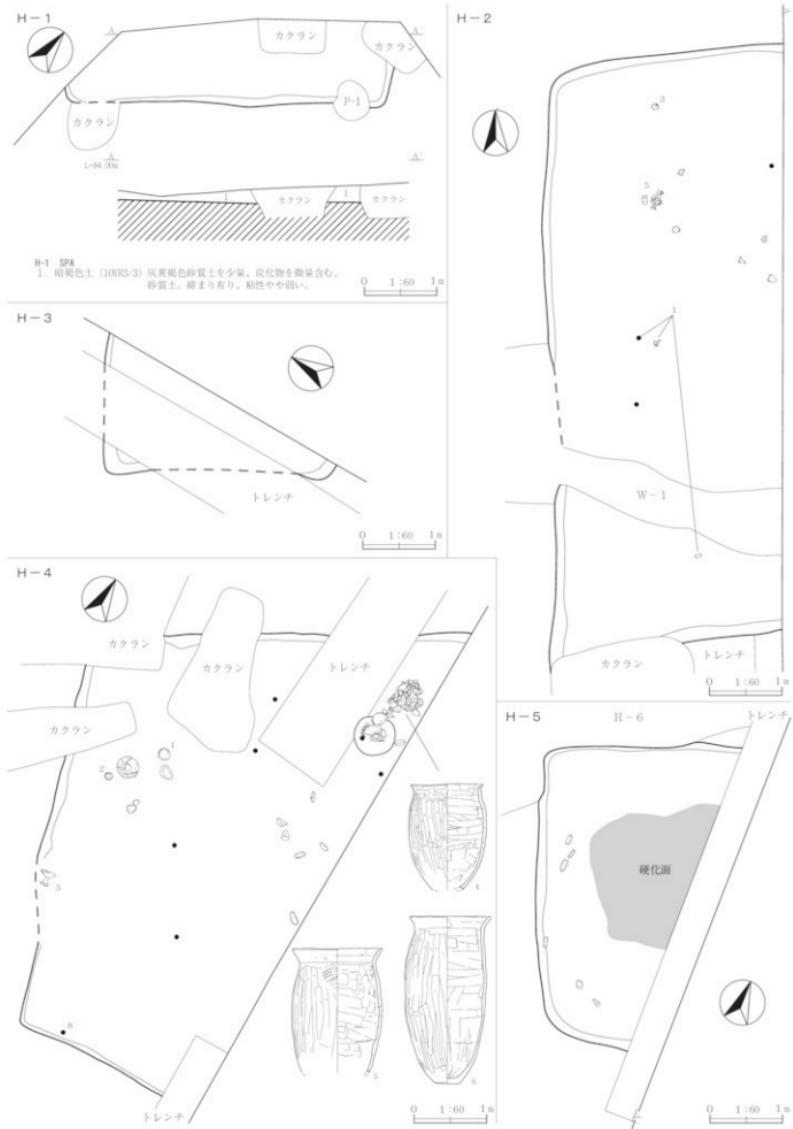


Fig. 6 H-1~5号住居跡

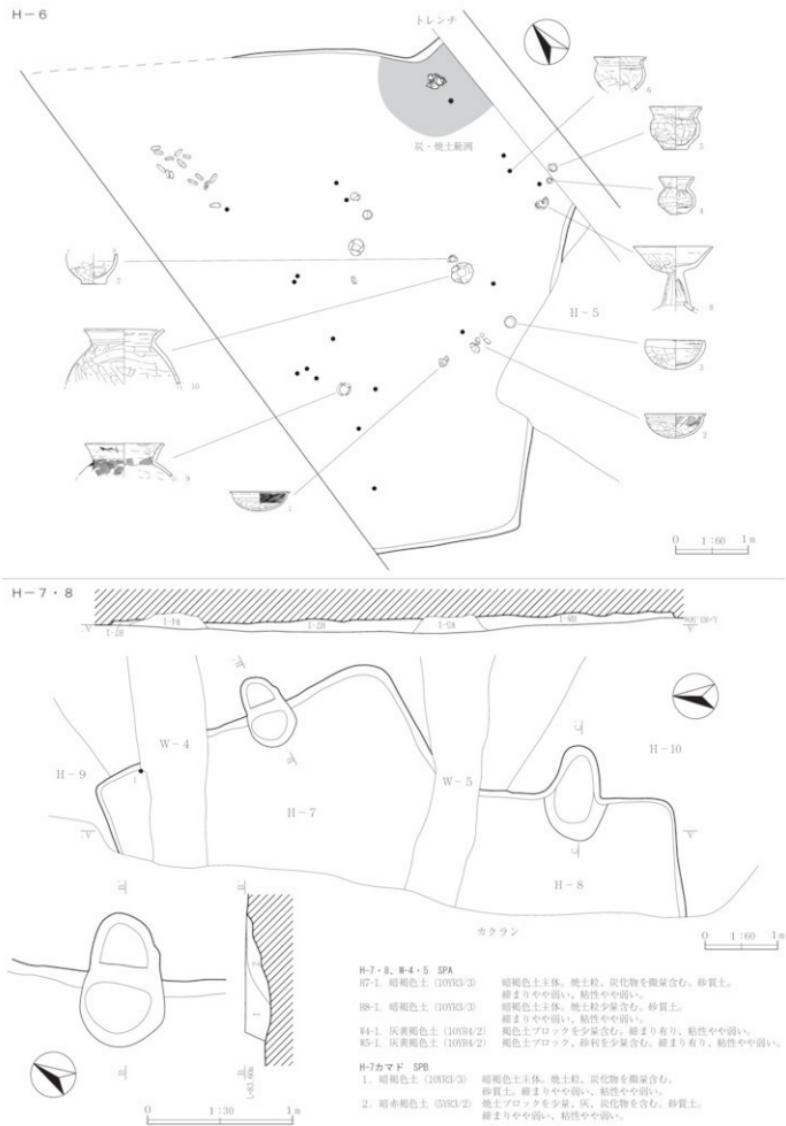


Fig. 7 H-6～8号住居跡

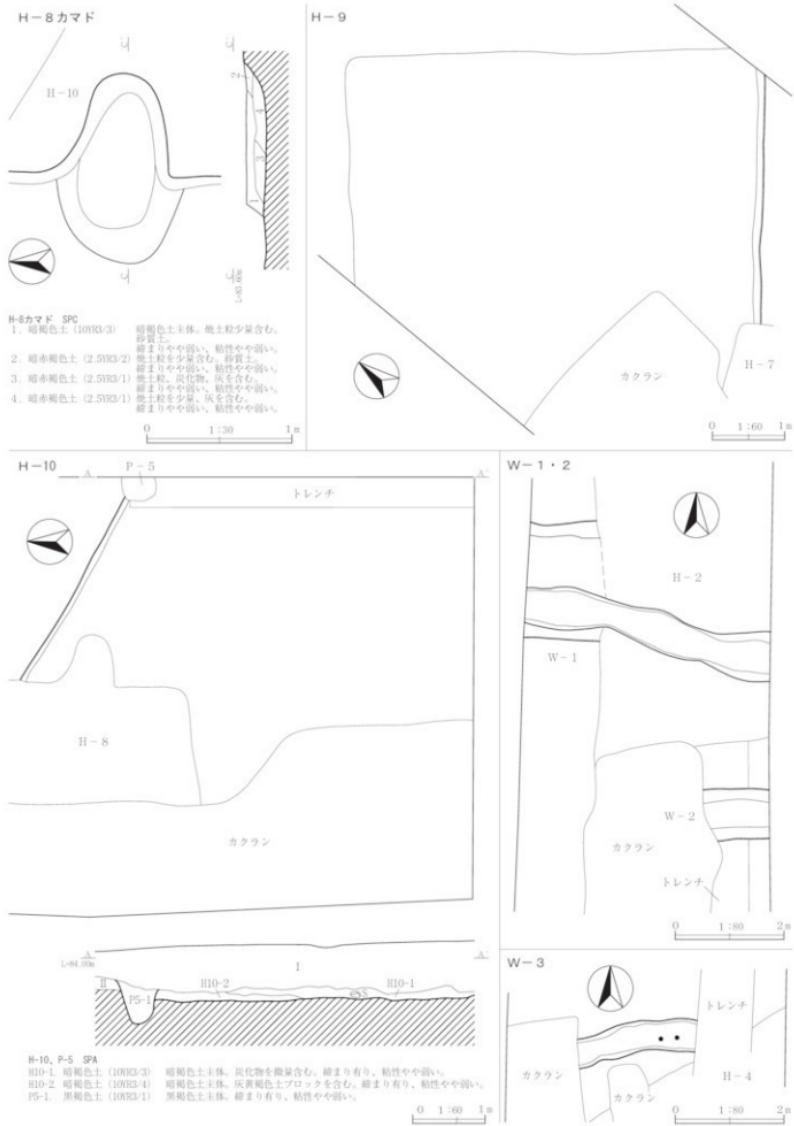


Fig. 8 H-8号住居跡カマド、H-9・10号住居跡、W-1～3号溝

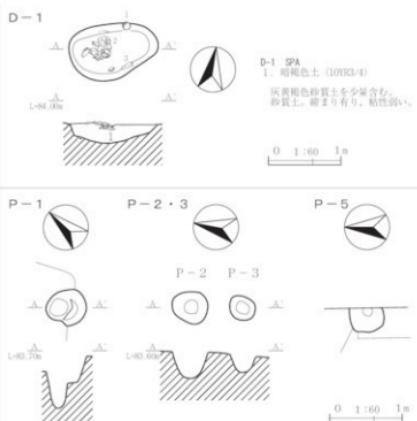
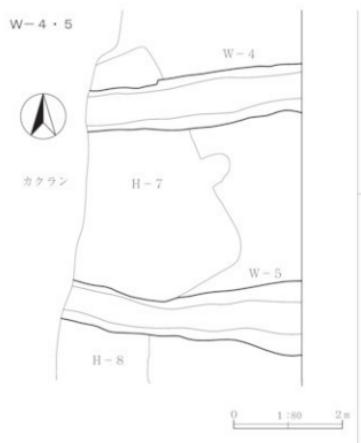


Fig. 9 W-4・5号溝, D-1号土坑, P-1～3・5号ビット

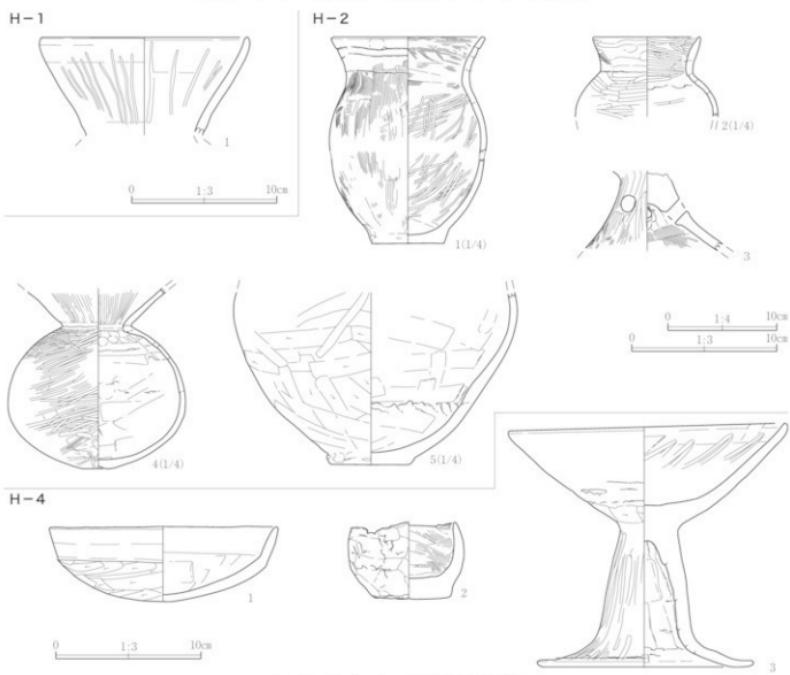


Fig. 10 H-1・2・4号住居跡出土遺物

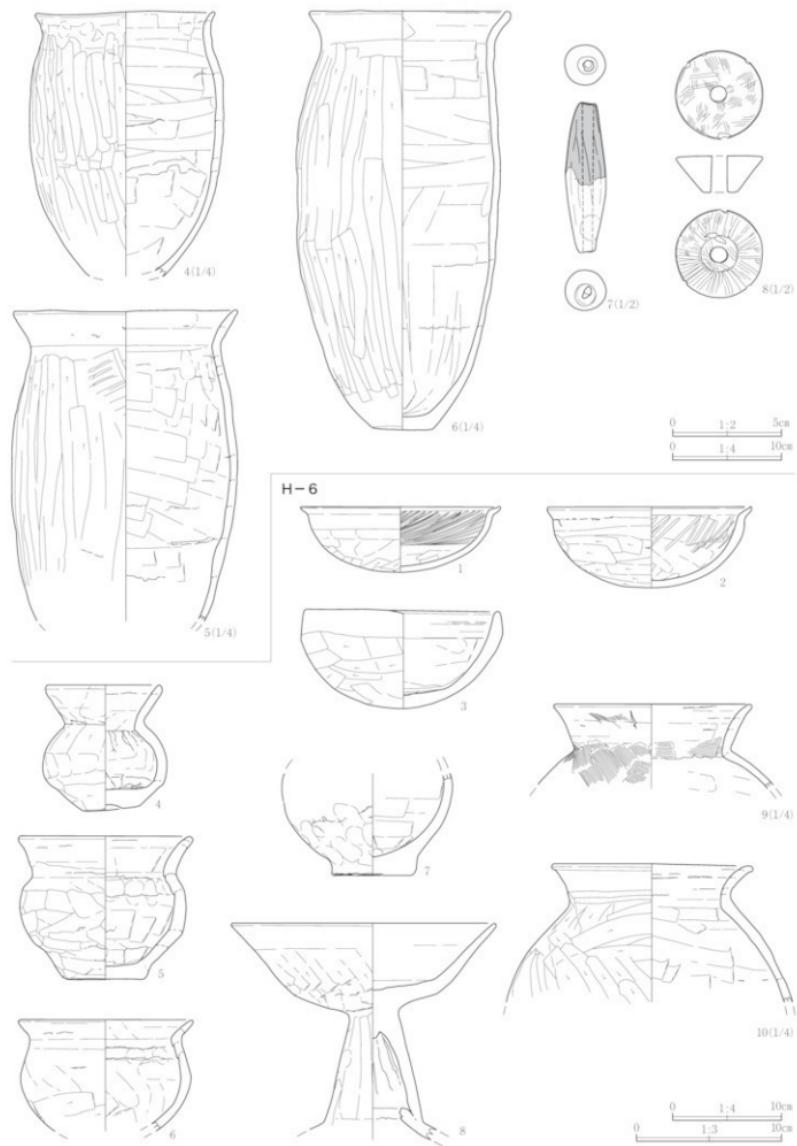


Fig.11 H-4・6号住居跡出土遺物
-12-



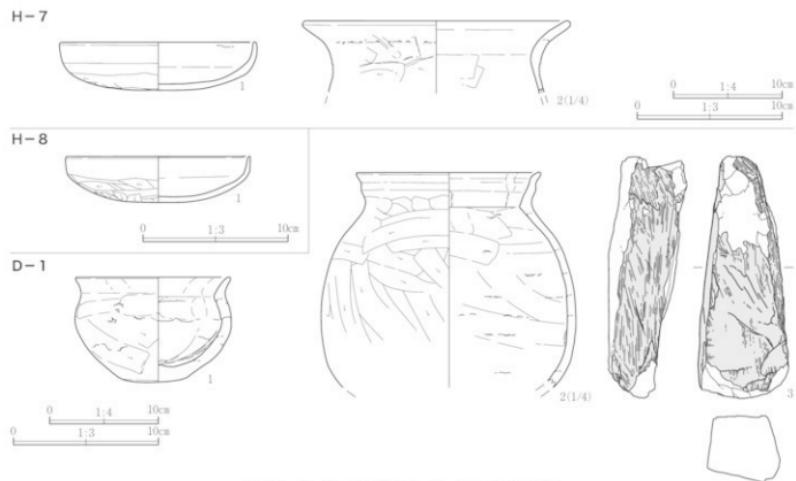


Fig.12 H-7・8号住居跡、D-1号土坑出土遺物



発掘調査風景



D-1 調査風景



発掘調査風景



Tab. 2 出土遺物觀察表

H-1											
番号	出土位置	種別	基層	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	断土	焼成	色調	形状、成・整型、文様等の特徴	残存状況、備考
1	墳上	土器群 奥	(14.2)	-	(6.7)	口・赤・赤色、 黄褐色	良好	褐色 褐色	内外面コナベリ付三段式。	口縁部厚肉厚。	現存状況、備考
H-2											
番号	出土位置	種別	基層	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	断土	焼成	色調	形状、成・整型、文様等の特徴	残存状況、備考
1	表面土	土器群 廓	(14.2)	-	(19.8)	口・赤・赤色、 黄褐色	良好	灰褐色 褐色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア付三段式。	口縁部厚肉厚。	現存状況、備考
2	墳上	土器群 小型器	9.7	-	(7.3)	口・赤色、 黄褐色、 チャート、 黒褐色	良好	褐色 褐色	外面部厚肉ハクゼア後付三段式、以下ハクゼア及びハクナ、 底部ハクゼア付三段式。	口縁・底部厚肉在存。	現存状況、備考
3	表面土	土器群 腹	-	-	(5.0)	口・赤色、 黄褐色	良好	褐色	外面部厚肉ハクゼア後付三段式、以下ハクゼア及びハクナ、 底部ハクゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
4	墳上	土器群 口	-	(2.3)	(16.0)	口・赤色、 黄褐色	良好	明赤褐色	外面部厚肉ハクゼア後付三段式、底部ハケラビナ付 三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
5	表面土	土器群 奥	-	7.3	(15.8)	口・赤色、 黄褐色、 黄褐色	良好	褐色	外面部厚肉。	外面部ハクゼア。	断面厚・底部厚肉。
H-4											
番号	出土位置	種別	基層	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	断土	焼成	色調	形状、成・整型、文様等の特徴	残存状況、備考
1	表面土	土器群 底	17.5	-	5.3	口・赤色、 黄褐色、 石英質	良好	褐色 褐黄色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
2	表面土	土器群 手前側	(7.2)	5.1	5.3	口・赤色、 黄褐色、 小鉄片	良好	明赤褐色	外面部厚肉ハクゼア後付三段式、以下ハクゼア及びハクナ、 底部ハクゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
3	表面土	土器群 高部	19.2	(14.9)	17.0	口・赤・赤色、 黄褐色、 石英質	良好	褐色	外面部厚肉ハクゼア後付三段式、底部ハクゼア後付ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
4	表面土	土器群 廓	16.3	-	(24.3)	口・赤色、 黄褐色、 火炎・小鉄	良好	赤褐色	外面部厚肉ハクゼア後付三段式、底部ハクゼア後付ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
5	表面土	土器群 廓	20.5	-	(26.0)	口・赤色、 黄褐色、 小鉄片	良好	褐色	外面部厚肉ハクゼア後付三段式、以下ハクゼア及びハクナ、 底部ハクゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
6	表面土	土器群 黄斑部	18.3	5.4	38.6	口・赤色、 黄褐色、 火炎・チャート、 黒褐色	良好	褐色	外面部厚肉ハクゼア後付三段式、以下ハクゼア及びハクナ、 底部ハクゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
番号	出土位置	種別	基層	高さ(cm)	最大径(cm)	断土	焼成	色調	墨書き (g)	形状、成・整型、文様等の特徴	残存状況、備考
7	墳上	土器品 土塊	6.9	1.9	口・白・赤色	良好	黄褐色	-	20.2	コナベリ、孔目状、0.5~6.0cm	現存、 上半部(後付)詳記。
8	表面土	土器群 廓	19.0	(16.0)	10.0	石質	焼成	色調	墨書き (g)	形状、成・整型、文様等の特徴	残存状況、備考
9	表面土	瓦片	4.0	0.7	1.7	砂岩	-	-	30.6	全表面削除、断面上部に墨書き無し 下部斜面剥落跡。	現存状況、備考
H-6											
番号	出土位置	種別	基層	高さ(cm)	最大径(cm)	断土	焼成	色調	墨書き (g)	形状、成・整型、文様等の特徴	残存状況、備考
1	表面土	土器群 底	13.9	-	4.5	口・赤・赤色、 黄褐色	良好	明赤褐色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
2	表面土	土器群 底	14.0	-	5.6	口・白・赤色	良好	明赤褐色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
3	表面土	土器群 底	13.2	-	6.5	口・赤・赤色、 石英質	良好	明赤褐色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
4	表面土	土器群 小型器	(7.7)	3.8	8.7	口・赤・赤色、 水滴	良好	明赤褐色	外面部厚肉コロコロアリコロコロ、底部ハクゼア後付ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
5	表面土	土器群 小型器	11.7	5.3	9.9	口・赤・赤色、 黄褐色	やや焼成	明赤褐色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
6	表面土	土器群 小型器	(11.9)	-	(7.7)	口・赤・赤色、 水滴	良好	赤褐色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
7	表面土	土器群 小型器	-	5.3	(7.0)	口・赤色、 水滴	やや焼成	赤褐色	外面部厚肉コロコロアリコロコロ、底部ハクゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
8	表面土	土器群 高部	18.3	-	(16.0)	口・白・赤・赤色	良好	褐色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
9	表面土	土器群 腹	17.8	-	7.8	口・白・赤・赤色、 水滴、黄褐色	良好	明赤褐色	外面部厚肉コロコロアリコロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、 底部ハクゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
10	表面土	土器群 腹	18.3	-	(12.5)	口・白・赤・赤色、 黄褐色	良好	黄褐色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
H-7											
番号	出土位置	種別	基層	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	断土	焼成	色調	形状、成・整型、文様等の特徴	残存状況、備考
1	表面土	土器群 底	(13.6)	-	3.3	口・赤色、 黄褐色	良好	褐色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
2	墳上	土器群 廓	(24.0)	-	(6.7)	口・赤色、 黄褐色	良好	褐色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
H-8											
番号	出土位置	種別	基層	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	断土	焼成	色調	形状、成・整型、文様等の特徴	残存状況、備考
1	墳上	土器群 底	(12.0)	-	3.15	口・赤色、 黄褐色	良好	褐色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
D-1											
番号	出土位置	種別	基層	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	断土	焼成	色調	形状、成・整型、文様等の特徴	残存状況、備考
1	墳上	土器群 小型器	10.5	4.3	7.2	口・赤・赤色、 黄褐色、 石英質	良好	褐色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア、内面部厚肉コロコロ、底部ハクゼア、以下ハクナ、 底部ハクゼア付三段式。	口縁厚肉厚。	現存状況、備考
2	墳上	土器群 廓	(16.8)	-	(19.8)	口・赤・赤色、 水滴	良好	明赤褐色	外面部厚肉コロコロ、以下ハクゼア及びハクナ、底部ハ クゼア、内面部厚肉コロコロハクゼア、以下ハクゼア、 底部ハクゼア付三段式。	口縁・底部厚肉在存。	現存状況、備考
3	墳上	砾石	-	-	16.7	6.2	5.4	ホルンフェルス	-	全面削除、断面上部にわずかに 残存厚肉厚。	現存状況、備考



VI まとめ

今回の調査の結果、古墳時代前・中期、奈良時代、中世以降に帰属する遺構が確認された。ここでは確認された遺構・遺物を検討し若干の考察を加え、まとめとしたい。

古墳時代前期

確認された古墳時代の住居跡は本遺跡の遺構の主体を占める。その内、4世紀代と考えられる住居跡はH-2である。H-2出土の壺（1）は赤井戸式土器系統のものと考えられ、口縁部に輪積み痕状に段を有し頭部下位を繩文施文では無く縦位に刷毛目調整が施されている。他の土器（2～5）は概ね古墳時代前期にみられる小型壺（2）器台（3）、堆（4）、壺（5）の器種構成を示している。

周辺地域での古墳時代前期の堅穴住居跡の分布は希薄であり今井白山遺跡で1軒のみである。本遺跡から北東方向にある荒紙地域では発掘調査の事例も多く、弥生時代から連続と続く遺跡が多く存在し集落跡も点在している。女屋宮田遺跡周辺の古墳時代前期の様相は広瀬川低地帯内での発掘調査事例の少なさも影響しているが、立地環境の点からも集落が少ない地域であり、主に赤城山南麓地域で確認される赤井戸式土器系の土器を有することから荒紙地区から続く集落の周縁部と考えられる。

古墳時代中期

本遺跡での5世紀代の住居跡はH-3・4・6である。H-3については出土遺物少量であり判断し難いが、小片の土器を観察するに当該期と考えられる。H-4・6は当遺跡で数多く遺物が出土した遺構である。H-4出土遺物は壺、高壺、壺を主体とする器種構成を示す。壺（1）は丸底化した体部と口縁部とを画す明確な稜線からやや外反気味に口縁部へと立ち上がる。全体的に肉厚に感じられる。高壺（3）は壺部口縁に向かって緩やかに内湾しながら立ち上がり、内面に窓磨きが施される。脚部は据部でハの字状に開き、外面には磨き、内面には輪積みの痕跡が残る。壺（4～6）は口縁部の屈曲が弱く、胴部に最大径をもち長胴化の傾向にある。外面は窓削り、内面は窓撫でを施す。H-6出土遺物は壺、小型の壺、壺、高壺、壺を主体とする器種構成を示す。壺は体部が弯曲し口縁部で短く外反するもの（内斜口縁壺、1・2）と、弯曲気味の体部のもの（3）に分けられる。小型の堆（4・5）は胴部箱型状に呈し、平底である。高壺（8）は壺部外面に緩い棱をもち、脚部は据部で屈折する。壺（9・10）は外反する口縁部と胴部中位に最大径をもつ膨らんだ状態を呈すると考えられる。両住居の特徴として長胴化した壺（H-4）、体部が弯曲し口縁部で短く外反する壺（H-6）が上げられる。H-4の壺に関しては5世紀代に見られる短胴で胴部中位に最大径をもつ砲弾形の壺からの系譜を引くものであり、長胴化へと変化する後出的な要因を考えれば5世紀第4四半期に位置づけられる。H-6は丸底化した壺、胴部中位に最大径をもち口縁部の屈曲が明確な壺等を考慮するとH-4よりは古段階の5世紀第3四半期に位置づけられる。D-1からは小型壺（1）、壺（2）、砥石（3）が出土した。小型鉢に関してはH-6出土のものと同形態を示し、壺は口縁部に段を有し胴部が球状に膨らむといった概ね5世紀代の様相を呈している。砥石は研磨痕が顕著に見られるためかなり使い込まれたものである。

古墳時代中期になると女屋宮田遺跡周辺でも集落が増加し始める。これは広瀬川低地帯周辺の微高地に集落を形成していた人々が低地内の微高地にまで集落域を拡げ水田等の生産域拡大を図ったためと考えられる。

奈良時代

確認された奈良時代の住居跡は2軒であり、調査区南側に隣り合う形で検出された。共に東壁に竈を持つ。大部分をW-4・5とカクランによって失われており、また壁高も低い為出土遺物は非常に少ない。その遺物中から図示し得たものを見ると壺（H7-1、H8-1）は口縁部が直ぐ立ちし丸底からやや平底気味に、壺（H7-2）は頭部から胴部へ向かってやや膨らむ形態を示すため、8世紀代に帰属すると考えられる。両住居跡は重複関係にあるが検討するには出土遺物が少ないためここでは同じ8世紀代の住居跡とした。



平安時代

本遺跡では当概期の遺構は確認されていないが、周辺遺跡をみると奈良時代から続く集落跡が確認されている為、本遺跡直近の場所でも遺構が存在すると考えられる。

中世以降

中世以降の遺構としてはW-1～5とP-1～5が上げられる。W-1～5に関しては覆土・東西に延伸する等の共通点がありほぼ同時期のものと考えられる。W-3からは培塿の小片が出土したが図示し得なかった。

今回の調査で古墳時代から中世以降に至るまでの遺構が多数確認された。古墳時代前期の住居跡は周辺地域では希薄であり、今回の発見で田利根川氾濫原の微高地である女屋地域で当時の人間が生活を営んでいたことが証明された。確認された遺構のほとんどは調査区外へと続く。現在の桃ノ木川流域に近い調査区南側で住居跡が確認できたことは現在と当時の河川流域にズレが生じていることが窺える。田利根川氾濫原の河川流域と集落域の拡がりを念頭において今後は調査すべきであろう。広瀬川低地帯内は大規模開発が少なく発掘調査事例も他地域と比べ多くない。近年増えつつある発掘調査事例と今後の調査・研究によって広瀬川低地帯内の遺跡分布・集落の動向が解明されることを願いたい。

参考文献

- 飯島義雄『今井白山遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
坂口一『今井道上市遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
坂口一『菟井八日市遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
坂口一『今井道上市遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
坂口一『野中天神遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996
武部喜光『宮田遺跡』 宮田遺跡調査会 1996
奥村雅之『石関西篠瀬遺跡・西片貝源田島遺跡』 石関西篠瀬遺跡調査会 1996
大西雅広『菟井中屋敷遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
神谷佳明『下芝五反田遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998
根岸仁『石関西田II遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002
小島敦子『荒砥前田II遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009
坂口一『群馬県における古墳時代中期の土器の編年』『研究紀要』4
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
坂口一『群馬県における古墳時代中期の土器の様相 一荒砥北三木堂遺跡の出土土器を中心として-』
『東国土器研究』5 東国土器研究会 1999
『木瀬村誌』 木瀬村誌編纂委員会 1995



PL. 1



北側調査区全景（下が南）



南側調査区全景（下が南）



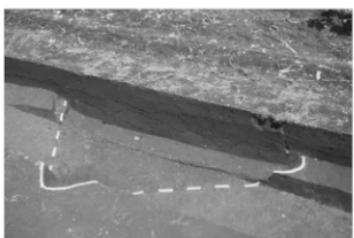
PL. 2



H-1 全景（南東から）



H-1、W-1 全景（西から）



H-3 全景（西から）



H-4 全景（東から）



H-4 遺物出土状況（南から）



H-4 遺物出土状況（南から）



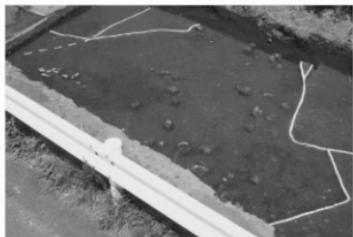
H-4 遺物出土状況（北から）



H-5 全景（西から）



PL. 3



H-6 全景（西から）



H-6 カマド全景（西から）



H-6 遺物出土状況（南から）



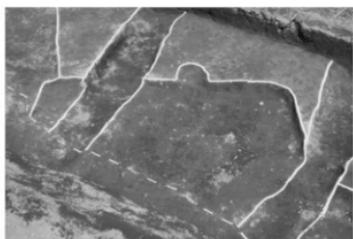
H-6 遺物出土状況（南から）



H-6 遺物出土状況（南から）



H-6 遺物出土状況（北から）



H-7 全景（西から）



H-7 カマド全景（西から）



PL. 4



H-8 全景（西から）



H-8 カマド全景（西から）



H-9 全景（南西から）



H-10 全景（北西から）



W-2 (西から)



W-3 全景（西から）



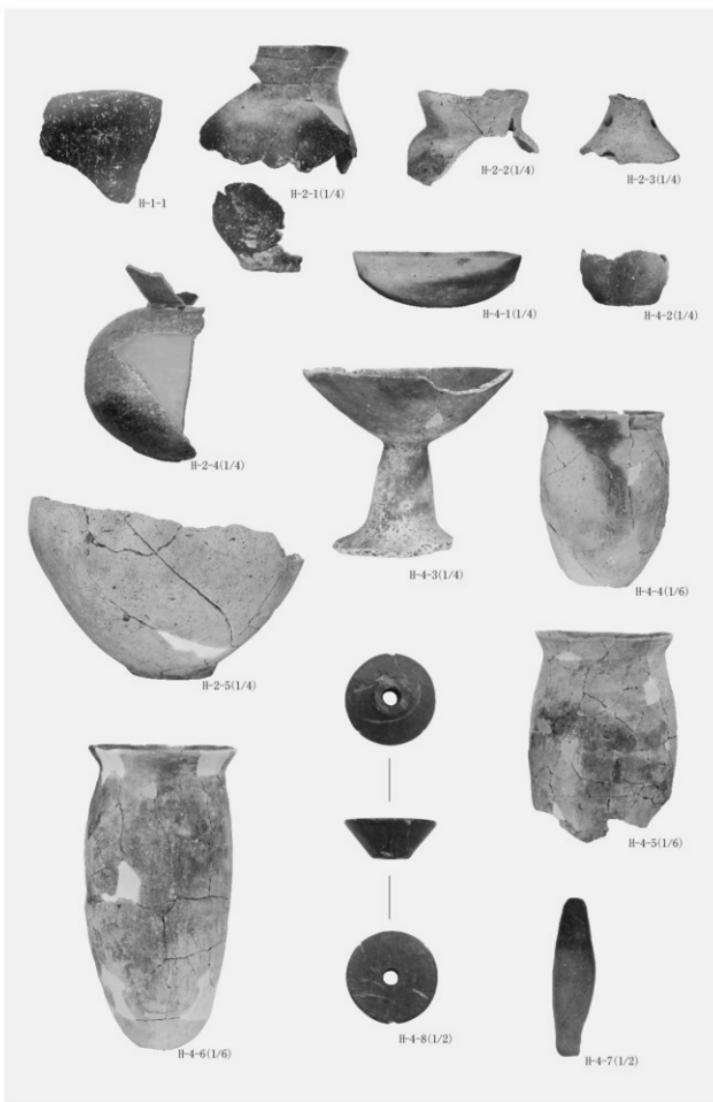
W-4・5 全景（西から）



D-1 遺物出土状況（北から）

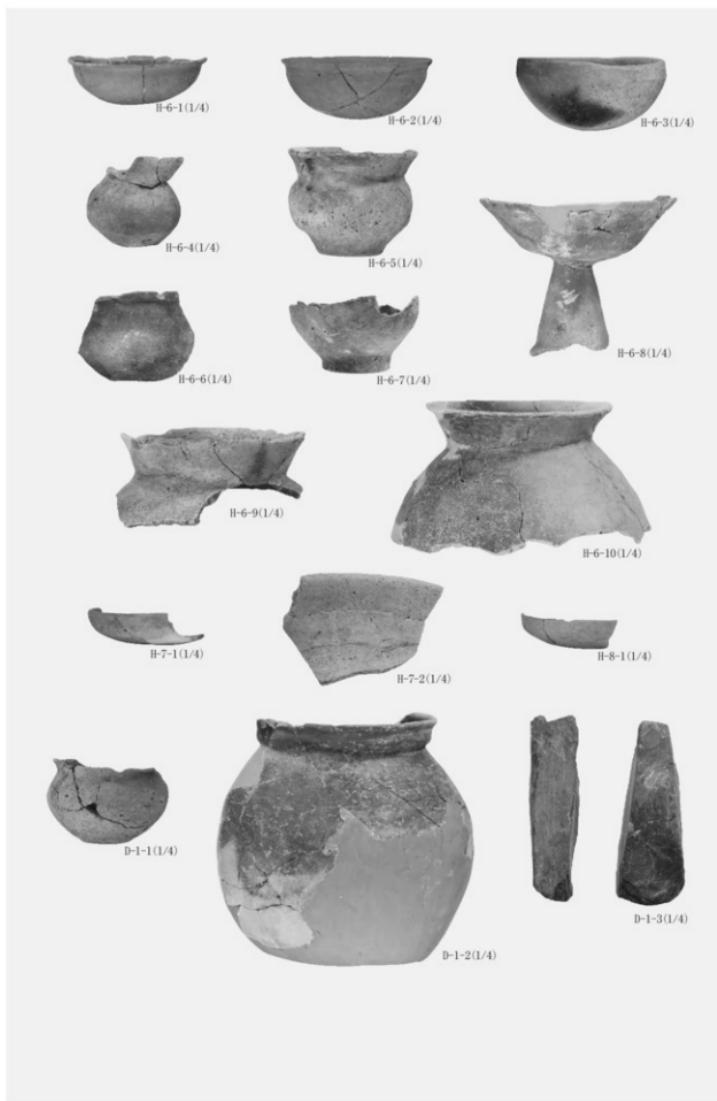


PL. 5





PL. 6





発掘調査抄録

フリガナ	オナヤミヤタイセキ
書名	女屋宮田遺跡
副書名	まちづくり交付金事業（市道00-081号線道路改良工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	神宮 聰・佐野 良平
編集機関	技研測量設計株式会社
発行機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
発行機関所在地	前橋市三保町二丁目10-2
発行年月日	西暦2010年1月29日

フリガナ	フリガナ	コード		位置		調査機関	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	北緯	東経				
オナヤミヤタイセキ 女屋宮田遺跡	マヌバシオナヤミヤ 前橋市女屋町40-4 ほか		10201	21F9	36° 22' 5"	139° 7' 57"	20090724 ～ 20090818	340m ²	まちづくり 交付金事業 (市道00-081号線 道路改良工事)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
女屋宮田遺跡	集落跡	古墳～奈良時代 中世	堅穴住居跡 10軒 土坑 1基 溝 5条 ピット 5基	土師器、石製品 土師器、石製品	

女屋宮田遺跡

まちづくり交付金事業（市道00-081号線道路改良工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010年1月22日 山崎
2010年1月29日 発行

発行

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市三保町2丁目110-2

TEL 027-231-9531

編集

技研測量設計株式会社

印刷

朝日印刷工業株式会社

